

特集「社会システムと向き合うネットワークサービス」の編集にあたって

山上俊彦[†] 関良明^{††}

論文編集にあたり、少し社会全体をとらえ、方法論や対象として技術に対して社会を等置した特集を組み、技術と社会への双眼的アプローチを推進することに注目した。グループウェアの研究は1980年代から技術的コンテキストと社会的コンテキストの並立をどのように行うかということをもとに発展してきた。技術と社会の両方にしっかりとした視点をもって、これを支援することが社会的にも求められている。

Web 2.0 を持ち出すまでもなく、近年のインターネットはPCの枠を越えて、モバイルあるいはさまざまな見えないインターネットとして社会生活に影響を与えつつあり、あらためて社会を支援する技術によって立つグランドデザインを問うような方向付けをしたいと考えた。社会システムと向き合うという問いかけの中に、社会システムから発想する、社会システムと補完する、社会システムに浸透するなど、さまざまな向き合い方への認識を改めて促し、社会システムと向き合うネットワークサービスについて研究成果をまとめる良い時期が来ていると判断し、特集号を企画した。本特集はさまざまな社会システム（組織、コミュニティ、文化、e-ビジネス、教育、コンテキスト）のための理論、基礎技術、普及と評価、支援システムならびにそれらの社会的インパクトの分析など幅広い観点からまとめることを意図し、論文を募集した。

その結果、40件という多数の論文投稿があった。特集号論文誌編集委員をメタレビューアとし、著者による修正期間を1か月に短縮した以外は通常の論文誌の論文と同じ手続きで査読を行い、1件は通常査読へ2件は取り下げとなり、37件の中から18件を採録した。採録率は47%となった。採録率をあまり高くすることができなかった原因の1つとして、社会システムと向き合うという特集を意識して問題設定が広すぎ、考察の結果が問題設定と整合しないものが散見された。この点では問題設定の共有化のために研究会やシンポジウムで特別セッションなどを組んで方向付けを行うこ

との必要性も感じた。

採録された論文を次のように分類して目次を構成した。まず、組織・協調活動に関する論文（5件）、次に、文化・コミュニティに関する論文（3件）、さらにe-ビジネスに関する論文（3件）、続いてコンテキスト・実空間支援に関する論文（4件）、最後に社会的安全に関する論文（3件）である。文化、e-ビジネス、実空間支援などはネットワーク化されたサービスの技術革新が社会に広範な影響を持ち、社会とネットワーク技術の融合において重要性を増していく技術領域である。

最後に、本特集号を企画する機会をいただいた論文誌編集委員会、優れた多数の論文を投稿していただいた方々、短期間の査読に協力していただいた査読者の皆様に感謝したい。本特集が社会システムを正面から取り扱う優れたネットワークサービス分野での研究活動の発展への一助になることを期待している。

「社会システムと向き合うネットワークサービス」
特集編集委員会

- 編集長（ゲストエディタ）
山上俊彦（ACCESS）
- 幹事
関良明（NTT）
- 編集委員 [敬称略, 50音順]
市村 哲（東京工科大学）、井上智雄（筑波大学）、
鶴飼孝典（富士通研究所）、梅木秀雄（東芝）、岡田謙一（慶應義塾大学）、緒方広明（徳島大学）、葛岡英明（筑波大学）、國藤 進（北陸先端技術大学院大学）、
爰川知宏（NTT）、小林 稔（NTT）、
垂水浩幸（香川大学/スペーススタグ）、中西英之（大阪大学）、
樫山淳雄（東京学芸大学）、星 徹（東京工科大学）、
宗森 純（和歌山大学）、吉野孝（和歌山大学）

[†] 株式会社 ACCESS

^{††} NTT